

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：24201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21730560

研究課題名（和文）学校—警察間連携の促進を目指した初期非行に対するアセスメントシステムの開発

研究課題名（英文）Development of an assessment system to promote school-police collaboration in managing juvenile delinquency

研究代表者

松嶋秀明 (HIDEAKI MATSUSHIMA)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：00363961

研究成果の概要（和文）：

広域化、複雑化しているとされる非行少年の立ち直り支援のために、警察と学校とのよりよい連携のあり方について、その実践に関わりながらの検討を行った。まず、2009年度は、警察が多職種連携をすすめるための媒介として(1)アセスメントツールの作成を作成するとともに、(2)補導職員、および中学、高校の生徒指導にたずさわる教師へのインタビューを行なった。2010年度は引き続き、補導職員へのインタビュー調査を続けつつ、補足的に自由記述式のアンケート調査を補導職員に対して行なった。2011年度は、これまでおこなってきたインタビュー・アンケート調査を国内、国際学会などで発表するとともに、年間を通じて継続的に補導職員への研修、コンサルテーションを実施することを通して、学校と警察とが協働した支援を推進した。

研究成果の概要（英文）：

In this project, we examined means to promote a collaborative relationship between police officers and school guidance teachers that would support the rehabilitation of juvenile delinquents. In 2009 and 2010, the following two lines of research were conducted: (1) we created an assessment tool to promote multi-agency collaboration; and (2) we conducted “semi-structured interviews” and “open-ended questionnaire” with the school guidance teachers and police officers. In 2011, we tracked some actual cases to determine whether the support systems were effective in fostering the rehabilitation of delinquent youth. During this yearlong case study, we also held consultation conferences and training sessions designed to help police officers support juvenile delinquents' rehabilitation.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|----------|---------|----------|
| 2009年度 | 900,000 | 270,000 | 1170,000 |
| 2010年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 総計 | 1800,000 | 540,000 | 2340,000 |

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：

キーワード：非行、警察、生徒指導、連携

1. 研究開始当初の背景

これまで初期段階の非行少年への処遇をめぐっては、非行性は進んでいないとされるものの、その行動範囲が広範囲にわたっており学校など単独での対応が難しいこと、発達障害や虐待を背景にもち、周囲からは理解が難しいとみなされる少年が少なくないことから、多職種による連携をすすめることが求められてきた。この連携を円滑なものとするために、適切に広範囲の情報が得られるアセスメントツールを作成し、多職種の円滑な連携の媒介となる条件について明らかにすることが求められる。

松嶋（代表者）は、これまで非行少年の更生過程、および、学校教師をはじめとして、少年の更生を援助するものたちがもつ実践的知識について明らかにしてきた。その結果、施設の指導員にしても、小・中学校の教師にしても、少年の特徴をたくみに言語化・意味づけしており、それは彼（女）らのおこなう実践のあり方を方向づけていることが明らかになった（松嶋,2004,2005）。したがって、これら少年の更生にかかわる諸成員の実践に関する語りをきくことは、彼らの体験世界を知り、協働体制を築くための契機になると思われた。

また、松嶋は2006年より3年間にわたり、いくつかの中学校において、非行や不登校といった「問題」を抱える子どもたちに対して、校内で援助チームを組織することで支援するシステムの導入に携わってきたが（松嶋,2007,2008）、そこでは異なる専門性をもつもののみならず、同職種間でも協働体制をとることが困難になる場合があることが指摘できた。情報共有をきっかけとして、同じ方向性をもつことが協働の成功に欠かせないことも示唆された。

このような先行する研究プロジェクトをふまえて、学校と警察の双方が、非行少年の更生支援のために情報を共有できるツールを開発し、システムをつくっていくことと同時に、そうしたシステムのなかで、学校と警察の双方が少年との関わりをどのように意味づけており、協働をどのようにとらえているのかを知ることが重要だと考えられた。

2. 研究の目的

以下の3つが目的となった。すなわち①警察を中心として、学校をはじめとした多機関連携を促進するためのアセスメントシートの開発、②実際にアセスメントシートを使うなかで、警察の補導職員、および中・高の生徒指導教員へのインタビュー調査、③実際のケースに即したコンサルテーションを通して、よりよい協働体制の構築の支援である。

3. 研究の方法

補導職員、および中・高校の生徒指導教員へのインタビュー、および自由記述式のアンケートの実施。コンサルテーションを中心とした継続的な連携体制の構築について、補導職員を支援しつつ、その過程について考察する。

①アセスメントツールの作成：少年の非行深度をふかめるリスク要因として知られるいくつかの要因（例えば、発達障害の有無、被虐待傾向、不良交遊など）について把握するうえで有用な質問を、国内外の先行研究の体系的レビューにより抽出・整理する。と同時に、これまで警察（少年サポートセンター）、あるいは学校で経験則的に使っていた非行少年を見立てるための知識を収集する。具体的には、滋賀県内で少年補導の仕事にたずさわる職員、および中・高校で生徒指導に関わるベテラン教員から聞き取り作業を行う。こうして得られた資料をふまえて、非行少年の予後を見立て、適切な処遇を行っていくための基礎資料となるようなアセスメントツール（具体的にはシート）を作成する。

②アセスメントツールの活用事例の収集：アセスメントシートが、学校と警察との連携でいかに使われるかを観察するほか、関係者へのインタビューを通して、より効果的な使用方法を示す事例を収集する。具体的には、(1)ケース会議におけるメンバーの言語的相互作用に注目して、アセスメントシートがどのように会議での会話を方向付けるのかを明らかにする。また(2)ケース会議に参加したメンバーへの聞き取りを行い、メンバーがどのような話し合いを志向しており、どのような不満を感じているのかを把握する。

4. 研究成果

2009年度は、警察や学校教師に対して、非行少年の問題を把握することを援助することを目的として、(1)アセスメントツールの作成、および(2)連携の活用事例の収集を行った。(1)では、A県内で少年補導の仕事にたずさわる職員、および臨床心理士から聞き取り作業を行い、非行少年の予後を見立て、適切な処遇を行っていくための基礎資料となるアセスメントツールを作成した。また、(2)としては、以下の3つの手法(2-1, 2, 3)によって行なった。すなわち、(2-1)年間数回にわたって、調査者もまじえたサポートセンター職員の研修会が行なわれた。そのなかで、実際の運用事例に関する検討会を行ないつつ、その問題点についての考察をおこなった。この結果、アセスメントツールは職員にとっては概ね好意的に受け入れられており、シートに書き込むことがらを意識しながら情報

の整理を行なうことで事例理解が的確になったとの感想もあった。また、このシートをもとに資料をつくることにより、サポートセンターから学校やその他の機関に措置する際にも、連携がスムーズにいったという報告もあった。書式には若干の修正変更がなされ、次年度にいかされることとなった。また、(2-2)少年サポートセンター職員を中心として、補導職員にこれまでの非行少年との関わり、学校との連携についての実践的知識の聞き取りを行ない、同時に(2-3)同県内の中学校・高等学校で生徒指導を担当する教師への聞き取りを行った。

2010年度は警察、学校教師へのインタビュー調査を続行しつつ、また、警察生活安全課の補導職員に記述式のアンケートを実施した。前年度末におこなわれたインタビューの結果に基づいて分析をおこなった。双方に求める役割について聞いたところ、学校から警察にむけた期待としては「抑止力＝歯止め」や「子どもをとりまく支援者の1人(つながれる人々を増やすこと)」であるとまとめられる。とはいえ、警察の動きが遅く、学校の大変さを理解していないのではないかとという不満もあった。こうした不満は、警察との関わりの少ない学校の方が多いのではないかと予想される。他方、警察から学校に対しては適度な情報共有がはかられ、また、少年についてのイメージを共有できることが重要であると考えられていた。「子どもをとりまく支援者の1人」として警察をみている教員には、普段からのマメな情報交換が連携のしやすさに結びつくという考えや、警察に頼る以前に、校内体制を充実させていくことの重要性を指摘するものもいた。以上のことから、学校は警察の「力」を過大視しており、警察は学校が抱える「不安」を過小評価するというディスコミュニケーションがあること、連携には<公式>のつながりより<非公式>なつながりが大きな意味をもつことが示唆された。こうした結果の一部は国内学会で発表された他、警察職員を対象とした研修会を通じてフィードバックされ、連携についての理解を深めた。

2011年度は、これまでおこなってきた①補導職員へのインタビュー、およびアンケート調査、②生徒指導教員へのインタビューの分析と発表、および昨年度に課題としてあげられた連携の改善へとつなげるための③具体的なケース運営についてのコンサルテーションを通して介入しつつ観察するという検討をおこなった。①、②について今年度はこれまでの発表内容を総括して International Society for Activity Research (ISCAR)で発表をおこなった。社会文化歴史的アプローチのなかで議論されている「境界的ワーク」や「関係のなかでむすばれる主体

(relational agency)」の概念を用いてコラボレーションを記述すべく検討をおこなった。結果として、学校にとっての警察との連携は、問題生徒の排除というよりも、境界的ワークが継続的におこなわれることによって、より教育的関わりを充実できるというメリットがあることがわかった。発表では、ポーランドやロシア、イギリス、アメリカといった国々の研究者と交流をもち、それぞれの国における警察と教育機関とのコラボレーションについての情報交換を行なうことができた。また③として、これまでの結果をふまえた実践へのフィードバックとして、本年はいくつかのケースをとりあげて年に数回、継続的にコンサルテーションの会議をおこない、短期的な支援目標を策定するとともに、長期的な支援の方向性について話あいを行なった。その結果、学校や地域のリソースとの協働のあり方をみなおしたり、本人を多くの大人が見守る関係をつくったりすることの起点となることで、最終的には本人の行動改善や、関係の良好化につながった。今後は、これらの結果を総合することで、論文化していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 松嶋秀明. 学校でコラボレーションの視点をいかす—大人の問題としての子どもの問題. 臨床心理学, 10(4), 530-534. (査読無し) 2010.
- ② 松嶋秀明. 境界線上で生じる実践としての協働—学校臨床への対話的アプローチ. 質的心理学研究, 7, 169-185. 2008.

[学会発表] (計14件)

- ① 松嶋秀明. 非行のある子どもの「集団」はどのように見立てられるか—児童自立支援施設職員の発達障害・被虐待生徒についての語りから. 家族研究・家族療法学会第28回大会 2011年6月4日. グランシップ静岡
- ② Matsushima, H. Bridging the boundary in addressing delinquent students: insider narratives of school-police collaboration. Third ISCAR conference. 8, September, 2011. Rome, Italy
- ③ 川俣智路・松嶋秀明. 行のある子どもの「生活」はどのように支えられているか(1): 児童自立支援施設職員の発達障害・被虐待児への対応に関する自由記述式質問紙調査から. 2012年3月10日. 名古屋大学
- ④ 松嶋秀明・川俣智路 非行のある子ど

もの「生活」はどのように支えられているか(2):児童自立支援施設職員の発達障害・被虐待児への対応に関するインタビュー調査から. 2012年3月10日 名古屋大学

- ⑤ 松嶋秀明. (2010). 学校と警察がつながることで少年に何がもたらされるのか—教員、補導職員への連携についてのインタビューから. 日本発達心理学会第22回大会. 2011年3月25日. 東京学芸大学
- ⑥ 松嶋秀明. (2010). 非行のある少年をいかに抱えるか 学校と警察との連携についてのインタビュー調査から 第52回日本教育心理学会総会 2010年8月28日早稲田大学(口頭発表)
- ⑦ 千原美重子・今井たよか・生田目聖子・田中泉・松嶋秀明・野田正人(2010). 保護者支援員の学校コミュニティへの支援と展開のプロセスについて. 日本心理臨床学会第29回秋季大会 9月3日 東北大学(指定討論者)
- ⑧ 安田裕子・谷村ひとみ・森直久・香川秀太・松嶋秀明・川野健司(2009). TEMによる質的研究の可能性の拡大—TEMによってどのような地平が開けるか. 日本心理学会第73回大会, 京都:立命館大学(指定討論者) 2009年8月26日
- ⑨ 松嶋秀明. (2009). いかに「うまくいかない」校内連携は維持されるか—学校心理臨床場面の分析から— 日本心理学会第73回大会, 京都:立命館大学 2009年8月27日
- ⑩ Matsushima, H. (2008). Dialogic construction of Collaborative culture. in school. 2nd ISCAR Congress UCSD, USA. (査読有り) 9月11日
- ⑪ 千原美重子・生田目聖子・田中泉・山田祥子・粟谷初子・鈴木葉子・松嶋秀明(2008). 学校臨床心理士に求められる地域臨床の視点—特に多様な危機介入における社会的支援のあり方を考える(指定討論) 日本心理臨床学会第27回大会. つくば国際会議場 9月4日
- ⑫ 岸野麻衣・松木健一・鹿毛雅治・松嶋秀明・山森光陽. (2008). 記録と語りがつなぐ実践研究の方法 日本教育心理学会第50回大会. 東京学芸大学(話題提供) 10月12日
- ⑬ 川俣智路・大久保智生・加藤弘通・岸野麻衣・松嶋秀明. (2008). 学校現場におけるフィールドワーク研究の意義と可能性 (3) 日本教育心理学会第50回大会. 東京学芸大学(話題提供) 10月13日
- ⑭ 加藤弘通・赤城和重・大久保智生・川田学・松嶋秀明・無藤隆. (2008). 教育における『個人と集団』日本パーソナリティ心理学会第17回大会お茶の水女子大学(話

題提供) 11月16日

[図書] (計3件)

- ① 松嶋秀明. 「学校不適応」の生徒は「障害／病気」なのか?. 大久保智生・牧郁子(編著) 『実践をふりかえるための教育心理学』ナカニシヤ出版 (pp159-170) 総頁数227頁 2011
- ② 松嶋秀明. ズレを通してお互いを知りあう実践: 学校臨床のディスコミュニケーション分析. 山本登志哉・高木光太郎(編著) 「ディスコミュニケーションの心理学: ズレを生きる私たち」東京大学出版会. (Pp71-90) 総頁数277頁 2011.
- ③ 松嶋秀明. 非行少年とその更生. 宮川充司・津村俊充・中西由里・大野木裕明(編) 『スクールカウンセリングと発達支援』ナカニシヤ出版 pp161-172. 2008.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松嶋秀明 (MATUSHIMA HIDEAKI)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号: 0036961